

〔「新年を祝う」展によせて〕

イノシシと日本美術

平成最後にあたる本年の干支は亥（イノシシ）です。筆者が卒業した大学は、イノシシがキャンパス近くに住んでおり、夜になって帰宅する時にしばしば遭遇して驚いた記憶があります。時にはウリ坊も一緒に。幸い筆者が遭遇したイノシシは人に慣れていましたが、一方で畑を荒らしたり、咬まれて怪我をしたといったニュースがしばしば見られます。

イノシシと人間との関わりは古く、縄文時代から狩猟の対象、あるいは家畜として飼育されていた可能性があるので。縄文土器には動物の形をデザインしたものがあり、イノシシをデザインした動物形土製品は、熊、猿、鳥、犬よりも多く出土しています。本稿では、亥年に因み、展覧会に出陳されるイノシシに関連する美術作品についてご紹介します。

まず最初は「日光月光十二神将図屏絵」（当館蔵）です。十二神将は薬師如来の眷属として日光、月光菩薩とともに表されます。十二支との結びつきは、平安時代後半以降に認められ、仏教図像の研究家であった覚禅が編集した図像集『覚禅鈔』には、「世流布像」と註記される略筆の十二神将が掲載されます。そこには、頭上に十二支を載せた神将像が描かれ、各々の干支も

明記されています（図1）。ここで屏絵を見てみると、「世流布像」と図像は一致しますが、頭上の十二支によって判別することが出来ます。イノシシは月光菩薩が描かれた左扉の最上部に描かれます。画面が痛んでいて分かりづらいのですが、鼻や牙の特徴は紛れもなくイノシシのものです（図2）。「世流布像」では、亥は「毘羯羅大将」に充てられ、右脇に弓を挟み、両手で矢を持つ姿をしています。一方、13～14世紀初めに成立した亮禅の『白寶口抄』では「金毘羅」とされ、太刀を持った姿で表されます。このように、典拠となった儀軌によって名称や姿に諸説あることが理解されます。さて、屏絵の表現に注目すると、左右の扉で顔貌や体つきに違いが見られます。また、鎧の描写では金箔の上から墨線で描き起こしを行う点や、衣文線に切金を置くとした古様な表現が注目されます。鎌倉時代に制作された厨子屏絵の優品として重要な作例です。

続いて「十五鬼神図巻」（当館蔵）です。これは高山寺伝来の白描図像で、鎌倉時代前半の作例と考えられます。『護諸童子陀羅尼經』に基づく、子供に取り憑いて悪さをする十五の鬼と、取り憑かれた子供の症例を具体的に示したものです。巻末にはこれらの鬼から子供を守

る乾闥婆が表されます。十五の鬼はキツネや猿といった動物の姿に擬えられるのですが、イノシシも登場します（図3）。これは富多那という鬼で、取り憑かれた子供は夜泣きをするという症状が説かれます。本図は縦が15cm程ですが、筆致は確かで個々の動物や赤子の姿が愛らしい作例です。

物語の中に登場するイノシシとして「曾我物語図屏風」（当館蔵）が挙げられます。敵討ちの物語として武家社会で愛好された、『曾我物語』『富士の巻狩』を視覚化した江戸時代の作例です。建久四年（1193）、源頼朝は多くの御家人と共に富士の裾野で巻狩を行いました。その最中に起きたとされる、曾我十郎祐成・曾我五郎時致兄弟の敵討ちを題材としています。その前後のいくつかのエピソードが画面に描かれるのですが、イノシシに注目すると、画面中央部分、一人の武士が今まさに仕留める様子が認められます（図4）。これは、巻狩の最中、源頼朝の前に突如現れ突進してきた手負いのイノシシを、新田四郎が見事に退治したというエピソードに基づくものです。暴れるイノシシを押さえる様子が表現されています。

疾走するイノシシを見事に描き出した作品が、特別出陳作品の一つである望月玉泉筆「猪図」（個人蔵）です（図5）。どことなく図4のイノシシと姿勢が似ています。「文久三年癸亥試筆」とあり、1863年の正月に描かれました。望月玉泉（1834～1913）は、幕末から大正期に活躍

した四条派の画家です。玉泉の描く猪図に「岩藤熊萩野猪図屏風」（東京国立博物館蔵）が知られます。右隻に藤が咲き誇る小川のほとりで獲物を探すツキノワグマの親子が、左隻に萩の中で眠るイノシシが描かれます。眠るイノシシ、すなわち臥したイノシシは「撫綏（ぶすい・民をいたわりやすんずる）」と音通となり、おめでたい画題でした。本屏風は明治天皇即位の年に献納されたことが知られます。一方、力強い筆致で駆けるイノシシを描いた「猪図」は、四条派や森派の描く吉祥的なイノシシの姿とは異なる、イノシシの勢い、猛々しさを表現するに相応しい、玉泉の冴え渡る筆遣いを感じられる見事な作例です。

猛々しさと静けさと、イノシシに投影されたイメージは両極端でした。ここには、各時代の人々がイノシシに向けたまなざしを窺うことが出来ます。鎌倉時代から江戸時代に至るイノシシを、展示場では猪突せず！にちょっとずつ!?お楽しみ下さい！新年早々からごめんなさい。

（古川攝一）

※図1は『大正新修大蔵經 図像部』第四巻、大蔵出版株式会社、1933年より複写致しました。



図1



図2

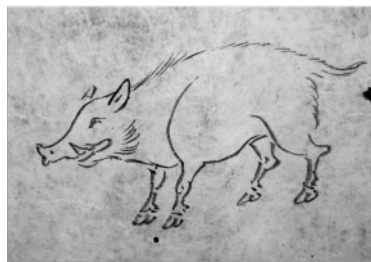


図3



図4



図5

季刊 美のたより No.205

平成31年 1月 5日

発行 大和文華館